Music from PaToNa　2025年度　【第12期】

やっぱり、PaToNa！

音楽監修	三宅 進	仙台フィルハーモニー管弦楽団チェロソロ首席奏者
プランナー	助川 龍	仙台フィルハーモニー管弦楽団コントラバスソロ首席奏者
プランナー	西沢 澄博	仙台フィルハーモニー管弦楽団オーボエ首席奏者

Music from PaToNaでは、有名曲、無名曲、かかわらずとりあげてきました。プランナーの二人の楽器が、オーボエとコントラバスであったことも、もしかしたらMusic from PaToNaの選曲の幅を豊かにしたかもしれません。

Music from PaToNaは、「オープンゼミナール」や、当日の司会で、その曲に取り組む音楽家のまっすぐな視点や、カッコいい、好きだ！と思う部分を、お客様にそのままぶつけてきました。これはともすれば、恣意的なイメージを植え付けてしまいかねない危険なことなので、3人は、とても慎重に「さじ加減」を見図っています。ただ研究に裏打ちされた音楽学者の言葉だけではなく、生の音楽家の心情も含めて伝えているのです。

まず、この曲をやろう、となった時に、真っ白な楽譜、或いは以前に誰かと一緒に演奏したことのある楽譜を前にして演奏家は、これまでに積み重ねてきた音楽の引き出しから色々なものを準備します。

演奏する場所、一緒に演奏する人でそれは大いに変化します。その時だけのものが出来上がるのです。そこで気づいたことや、こうしようと思ったことを、Music from PaToNaのメンバーは惜しみなく、お客様に伝えようとします。ある意味で「手の内」を一部明かした上で、作品を享受しようとしています。

「初めて聴く」曲も、「今までにたくさん聴いてきた曲」も、Music from PaToNaで改めて耳にして、味わうこと。その音楽の共有度合いを表現するのに、「やっぱり、PaToNa」という言葉に至ります。それほどに、お客様と奏者のシンクロが大きいのです。緊張する場面は客席でも一緒に息をのむように、喜びに開放される時には客席でも一緒に昂る様子が感じられ、奏者はそれに突き動かされているのです。

近現代の曲はニガテという方も少なくはありません。当然、「受け入れられるか心配」するのですが、開けてみると、その曲が一番心に残ったと帰られるお客様が多数いらっしゃるのです。複雑な現代社会に生きる日々に、不思議と響くもの、リンクするものがあるからかもしれません。

クラシック音楽は再現芸術。人類の歴史もまた様々な「繰り返し」があります。良いことも悪いことも。人類が音楽や芸術とともに潜り抜けてきた時代。過去にひもとける感情への共感は少なくありません。

Music from PaToNaでは、故きを温ねて新しきを知ることと、新しき挑戦を繰り返しています。

出演者の主軸は、地元の貴重な音楽資源である、仙台フィルハーモニー管弦楽団のメンバー、仙台、東北ゆかりの奏者たち、そしてその友人たちです。

作曲家で、当シリーズともゆかりの深い吉川和夫氏は、Music from PaToNaについて、「プログラムの質が高く、奏者と聴く人の双方を育てている」（2024年12月26日「河北抄」より）と評してくださいました。

インターネット上で世界中の音楽を聴くことができるようになったり、全音楽家がPCやスマホひとつで、世界に向けて発信できるようになったこの時代においても、聴衆ありき、生で聴いて、コンサートシリーズを「育てて」くださるお客様がいる。これは国内でも稀に見る奇跡的なことなのです。